

はじめに

二〇〇九年夏、民主党が掲げた「政権交代」に多くの有権者が期待を託した。そして日本の政治史上はじめて選挙結果を受けて政権党が交代することとなった。「政治主導」という言葉にこれまでの政官業のトライアングルの政治からの脱却を、「コンクリートから人へ」という言葉に公共事業による財のばらまきからの脱却を期待した有権者も少なくなかっただろう。こうした有権者の期待は、鳩山政権発足時の高支持率に端的に示されていた。

しかし、民主党政権に向けられた期待はまもなく大きな失望へと変わった。「政治とカネ」の問題や普天間基地問題をめぐる迷走などにより、鳩山政権は発足一年足らずで退陣し、代わって登場した菅政権もまた、参議院選挙の惨敗を経て低支持率にあえいでいる。このように、現在私たちが目にする日本政治の現状は、出口がみえない混迷状況を示しているようにみえる。

とはいえ、日本の政治が確実に変化の時代に突入したということもまた否定しえない。つまり、民主党政権の行く末がどうなるうとも、かつての五五年体制とか自民党一党優位の時代に戻ることはありえない。日本政治は新たな舞台装置を模索しており、それはまた、日本の経済や社会、そして日本を取り巻く国際環境の変化と連動している。私たちは、出口のみえない混迷状況のなかで新しい政治の在り方を追求せざるをえないし、追求しなければならぬとい

うことを、まずは確認しておく必要があるだろう。

では、私たちが本書のタイトルとして掲げる「実践の政治」という観点から、現在の日本政治の状況をどのように考えることができるだろうか。近年の日本政治は、かつてないほど、有権者や国民によって形成される世論の影響を大きく受けるようになった。二〇〇五年の郵政選挙にせよ、二〇〇九年の政権交代選挙にせよ、(小選挙区制という過剰代表の問題はあるとはいえ)世論の地殻変動が選挙結果を大きく左右した。また、マス・メディアによって頻繁に行われる世論調査が、その時々の内閣の政策に影響を与えたり、果ては首相候補レースすら左右する。こうした世論の影響力の強さはかりでなく、近年のマニフェスト選挙の普及により、政党や政治家は有権者に対して具体的な政策を提示することを迫られ、選挙後にはマニフェストを介して有権者と交わした約束に拘束されるようになっていく。さらには、事業仕分けにみられるように、政治家と官僚のやり取りが密室ではなく衆人環視のもとで行われ、多くの人々が会場であるいはインターネットでその模様をみるようになっていく。

これらのことから、かつては政治家や官僚、一部の業界団体といった閉じられた世界の人々によって運営されてきた政治の世界が、一挙に私たち市民に開かれるようになってきているともいえるし、また、私たち市民の意識が選挙ばかりでなくその時々々の政治状況にも世論調査というかたちで影響を及ぼすようになったともいえる。

しかし、はたしてこうしたことは、私たちが提示しようとする「実践の政治」なのだろうか？ 私たちは必ずしもそうは考えない。私たちがいう「実践の政治」というのは、日本の「市民社会の活性化を出发点」にして、「生き、暮らし、働き、学ぶ普通の市民が政治に関心をもち政治に介入する」ことの意味と方法を追求するものである。このような視点から現在の日本政治の状況をみてみると、有権者や国民と日本の政治の関係は、「市民」による政治的实践というよりもむしろ、「消費者」による政治的関与といった性格のものではないかと思われる。この問題をわかりやすく理解するために、たとえ話を一つ示してみよう。大きな食堂をイメージしてほしい。食堂にはカウンターを隔てて厨房と食事をするテーブルがある。厨房で料理を作るプロの料理人と食堂で食事をする人々はカウンターで完全に仕切られている。これが従来の政治の世界であったとするならば、「実践の政治」がめざすところは、このカウンターの仕切りを少し低くして、厨房で何が行われているのか、私たち自身が知ること、そして私たち自身が単に注文した食事をとるのではなく、厨房にも何らかのかたちでかかわっていくこと、そのことによって料理の質や種類をより良きものにしていくことである。

しかし、昨今の政治状況は、有権者や国民が厨房に何らかのかたちで参画していくのではなく、カウンターの外から厨房内を監視するとともに、カウンターに出された料理に対してあってもないこうでもない注文をつける、というかたちになっていないだろうか。もちろん、出される料理に何の文句もいわず黙々と食べるというよりはましなのかもしれない。

だが、そこには大きな落とし穴がある。厨房にあれこれ文句をつける消費者は、消費者のなかにも好みの多様性があるということをしれば忘れがちである。また、何よりも消費者自身の食生活をどうすればよいのかという自己省察を著しく欠いたまま、もっぱら厨房内で働く料

理人の技術や作法ばかりを問題にしがちである。私たち自身の政治への参加（それは当然責任も伴う）や、さらにいえばライフスタイルのあり方を横においたまま、この間の政治状況に対して嘆いたり、不満を表出したりしているだけではいけないのだろうか。

たとえ話がやや長くなってしまったが、ここで読者のみなさんに伝えたいのは、日本の政治が変化の時代に入っている今こそ、私たちが市民として政治に関与するというのは、いったいどういうことなのか、しっかりと考えてみてほしいということである。食堂に入り、一方的に厨房で働く料理人に文句をいうのではなく、厨房のしくみを自ら学びつつ、アマチュアなりに参加していく方法にはどのようなものがあるのか。また、好みやこだわりがお互い異なる私たち自身が、協力したり連帯したりすることの意味を考え、私たち自身のライフスタイルそのものにまで思いをはせてほしい。

このような問題関心もあって、今回の改訂にあたっては、政治の世界へのアクセスとそれに必要な制度や状況に関する理解だけでなく、スローライフ論など私たち自身の市民生活や市民社会のあり方を問う内容を新たに組み入れた。本書は、七章から構成されているが、読者の関心に応じてどこから読んでいただいても構わない。本書を通じて、単に政治に関する知識を習得するというのではなく、私たちが自身の問題として政治を考え、転換期にある政治の世界のなかで私たちにいったいどのようなことができるのか、じっくりと考えていただきたい。

二〇一二年二月